講師 ： 坂本豊治
出雲弥生の森博物館

「弥生時代の埋葬儀礼
～西谷3篭遣を申心に～」 を聴いて

聴講日 ： H29.8.5
むきばんだやよい塾第18期

西谷墳墓群の発見は、1953年に地元の中学生が4号墓で土器を拾った時に遡ります。1983年から10年をかけて、島根大学考古学研究室による西谷3号墓の発掘調査が行なわれ、出雲王の存在が証明されることとなりました。その後出雲市も発掘調査を進め、2・4・9号墓の大型四隅突出型墳丘墓が次々と築造されたことを突き止めました。3号墓の調査は島根大学考古学研究室が黎明期にあったことなどから報告書の刊行が遅れ、これまで公表されていなかった多くの事実が2015年の刊行で明らかになりました。

現代においても朝夕仏壇に手を合わせる人がいます。また、年越しの二年参りにはたくさんの人がお寺や神社を訪れます。受験シーズンに合格祈願のお札を求める人は霊魂を信じているのかもしれません。格の高い霊魂としては神が挙げられます。大きな力を持った人がなくなると災いをもたらさないようにと祀り上げられ、怨霊として恐れられたりします。闇夜に何かの気配を感じると、そこには妖怪や幽霊が潜んでいると思われてきました。記録が残る古代以降については、人々が霊魂をどのように捉えてきたかを知ることができますが、文字のない縄文時代や古墳時代の人々は霊魂をどのように感じてきたのでしょう。お墓の形態や埋葬の様子からそれを探ってみたいと思います。

西谷3号墓の概要

出雲の最古の墳丘墓は、出雲市中野美保2号墓ですが、他を圧倒するような隔絶した規模ではありません。後期後葉になると、状況が一変し、出雲・松江・安来で時を同じくして多くの墳丘墓が造られ始めます。そのなかで、大型の墳丘墓が突如、出雲と安来で出現します。このことから、これら二つの地域に王が登場したと推定されます。特に出雲市の西谷3号墓は、詳細な発掘調査が行なわれ、超大型の四隅突出型墳丘墓とわかり、埋葬施設や副葬品も隔絶していることが明らかになっています。

西谷3号墓は、島根県出雲市大津町字西谷に所在し、斐伊川左岸の低丘陵上に立地します。出雲平野は、斐伊川と神戸川の二大河川によって形成されました。弥生時代の斐伊川は、出雲平野内を西に流れ、「出雲国風土記」に「神門水海」と書かれた潟湖に流入していました。これらの川や潟湖の周辺の微高地には、たくさんの集落遺跡があることが近年の発掘調査からわかってきています。

西谷3号墓は、長方形の墳丘の4つの隅が突出した大型の四隅突出型墳丘墓です。墳丘は、自然丘陵の高まりを利用し、盛土によりかなり整った形に造っています。墳丘斜面から墳裾部にかけては、約2万5千個の貼石で覆われていました。突出部上面はかまぼこ形にふくらみ、石が貼られていたことが確認されました。このような外観は、遠くから望んでも目立ち、当地の王権の確立を広く誇示する存在だったことでしょう。まさに、出雲王が登場したことを象徴的に示す記念物でした。

西谷3号墓の木椁は、第4主体と第1主体で確認されています。第4主体には2つの木椁があり、土壙の底にある大型の椁を主椁、その上部東側にある椁を副椁と呼んでいます。これらのうち、構造が複雑で最初に造られた第4主体の主椁こそが初代の出雲王のものです。残念ながら、木椁・木棺の木材は腐って残っていませんでした。

墳墓で行われた儀礼の意味

墓上儀礼についてはこれまで ①首長権継承、②中国思想の影響を受けた再生・復活、③鎮魂の3つが考えられてきました。①は古くから提唱され近藤義郎,春成秀爾,水野正好,辰巳和弘,石野博信,森岡秀人等の大御所らが賛同していますが、岡田精司氏が古代の天皇の即位が先代天皇の埋葬より先行していることや、時代は降るものの出雲国造の継承事例等と整合しないことなどから批判しています。②は1990年代に提唱され田中琢,小山田宏—,辰巳和弘,車崎正彦ら現状で多くの研究者が賛同している説です。しかし

②は中国思想を列島にそのまま当てはめていることに問題があります。列島には、縄文時代から古墳時代にかけて特色ある埋葬観念がありました。それは田中良之氏が人骨研究から明らかにした再生阻止儀礼(鎮魂)です。再生阻止儀礼は荒ぶる死霊を慰め、再生しないようにするための儀礼です。墳墓には死者の密封形で表現されます。とくに鎮魂の祈りが強い場合は、副葬品や遺体の毀損が行われます。具体的には、目張り粘土や粘土で棺(死者)を密封することなどです。鏡や玉類の毀損、鉄器を折り曲げて機能停止することなどもあります。最も再生阻上を願って行われたのが遺体毀損です。 そして死霊の穏やかな鎮魂を祈って飲食物を供献すると考えています。

西谷3号墓の埋葬儀礼と墳墓築造の意味

2015年の西谷3号墓発掘調査報告書および2016年の図録では、死者を密封した後に「石主」に亡き首長の霊を宿らせて共飲共食儀礼が挙行されたと解釈されています。 しかし、丁寧な密封をした後に死霊を再び蘇らせることに矛盾があります。ここでは、これまでの研究史を踏まえ、弥生時代～古墳時代前期の墳墓築造の意味は死霊の鎮魂であったと考えています。西谷3号墓でも、死霊の鎮魂を祈る盛大な埋葬儀礼が行われたのであり、墓上の方形区画は二重の柵と考え、古墳前期の桜井茶臼山古墳の丸太垣につながる構築物と推定しています。これも鎖魂を祈る施設だと考えています。そして、新しい型式の土器が出土することから、一回では達成できなかった鎮魂を追加儀礼を行うことで、死霊は個性を失い、祖霊となると理解しています。

墳墓でおこなわれた儀礼の意味（研究史）

	首長権継承 （共飲共食）	再生・復活(遺体保護) （中国思想・神仙思想の影響） カミの憑依	鎮魂 （再生阻止・壁邪）
1960年代	近藤義郎，春成秀爾		
1970年代	水野正好，辰巳和弘		
1990年代	石野博信，森岡秀人	田中琢，小山田宏一 辰巳和弘，車崎正彦	田中良之
2000年代		広瀬和雄，清家章	田中良之
2010年代			穂積裕昌，坂本豊治 笹生衛，下條信行